

宣長は笑う

——「詞のいきほひ」から俗語訳の文体生成を探る——

塚本 泰造

本稿は、『古今集遠鏡』のある表現の考証を通して、古典語の訳から生まれた口語の性格を明らかにしようとするものです。

はじめに

本居宣長の『古今集遠鏡』（以下『遠鏡』と略称）に見られる俗語は、古今集の和歌を訳すことから生まれたものです。その訳の基本は、「てにをはのはたらき」に留意しつつ、最終的には「いきほひ」、特に「詞のいきほひ」で整えることでした（『遠鏡』「例言」¹⁾。王朝の貴族が目の前にいないにもかかわらず、当代の口語に移しかえらると、一種の「翻案」に近い部分もあったはずで、宣長の「詞のいきほひ」と抽象的に言い表しているのは、いったい具体的にはどういう場の想定、あるいはことばの操作を行なうことだったのかは、まだ詳らかではありません²⁾。

さらに「詞のいきほひ」を明らかにすることは、近世の日本

語資料としての『遠鏡』の活用の仕方にも関わります。「いまの世の俗語（サトビゴト）」（「例言」）といっているのは、身分の階層もあれば、共通語もまだなかった時代のことはこのことから、これは当時の口語体系のどんな部分・文体³⁾を表すものであったのかという見定めが必要なわけです。言い換えれば、訳を通してどうやってこういう俗語に表現されたのか、その下地を探るということです。

本稿では、「詞のいきほひ」を端的に表している俗語訳の例を手がかりに、次の2点

- 1 笑い声の写生音
- 2 その写生音を付加することのできた場面を担う指定辞の様相

から考察を加えます。

一、「へ、、、」を加えたのは

「おのがいまのたはぶれ」ではない

宣長が「詞のいきほひ」の例として挙げているのは、次の箇所です。

すべて人の語は、同じくいふことも、いひざまいきほひにしたがひて、深くも浅くも、をかくもうれたくも聞ゆるわざにて、歌はことに、心のあるやうを、たゞにうち出たる趣なる物なるに、その詞の、口のいひざまいきほひはしも、たゞに耳にき、とらでは、わきがたければ、詞のやうをよくあぢはひて、よみ人の心をおしはかりえて、そのいきほひを譯すべき也、たとへば春されば野べにまづさく云々、といへるせどうかの、譯のはてに、へ、くへ、く、と、笑ふ聲をそへたるなど、さらにおのがいまのたはぶれにはあらず、此下句の、たはぶれていへる詞なることを、さとさむとてぞかし、かゝることをだにそへざれば、たはぶれの答なるよしの、あらはれがたければ也、かゝるたぐひ、いろくおほし、なずらへてさとるべし、p74

宣長は、俗語に訳するには「いきほひ」を訳すべきであつて、その例として笑い声「へ、、、」を必然として付け加えたと述べています。当時としては、この笑い声はどのような価値を持つ

たことばだったでしょうか。

『日本国語大辞典 第二版』では、感動詞「へへ」の項に、初出例として「咄本・くだ巻」(1777刊)の用例、

イヤ、茄子も第一、色か見事で御ざる へへ、色のよいわ
茄子にも限りませぬ

の次に先の引用部分をあげています③。さらにこの写生音をあさらかにするには、「例言」の箇所だけでなく、実際の旋頭歌の訳例の方も見る必要があります。それは次のようなものです。

かへし

(よみ人しらず)

春されば野べにまづさく見れどあかぬ花。まひなしにたゝ
なるべき花の名なれや

○コレハ春ニナレバ 野ヘンニマヅ一番ガケニサク花デ
見テモく見アカヌ花デゴザルガ 其名ハ 何ゾツカハサ
レネバドウモ申サレヌ タゞデ申スヤウナヤスイ花ヂヤゴ
ザラヌ へ、くへ、く、

p 266-267 国歌大観番号10008

(傍線は宣長による『遠鏡』の記号。現在で言えば())
にあたるもの。心中語も含むときがある。以下『遠鏡』の傍線は本文のまま。)

お町「何を阿呆らしい。」

瀬平「へ、あつたらこつちやな。田から行も畔から行も、

御為じやと思ふてするこつちや

歌舞伎 幼稚子敵討 1753

(傍線は塚本。以下同じ。)

をあげていきます。しかし「へ、」の引用例のすぐあとに、「階級や人格の卑しさを暗示する「へへへ」と述べるのは、少し丁寧さを欠いた記述ではないかと考えられます。

というのも、国文学研究資料館の日本古典文学本文データベースをもとに、近世の口語を表す代表的なジャンル(斬本・浄瑠璃・歌舞伎・黄表紙・洒落本・滑稽本・人情本)から用例を集めてみると、「人をばかにしてせせら笑う」のは「へ、」であつて、「へ、」のように、二拍以上に表記されるものには嘲笑性がないとわかるからです。

二つに分けて用例を挙げます。『遠鏡』以前の用例は全てあげ、以後のものは適宜示すこととします。

○「へ、」

1 イヤ、勿論一富士二鷹三茄子と申習はしたれと、富士ハ三国の名山、鷹も諸鳥の司。茄子ハ此二種にくらべものにハなりませぬ。めで度とハ心得ませぬ イヤ、茄子も第一、色か見事で御ざる へ、色のよいわ茄子にも限りませぬ そんならうまいもので御ざる

ならうまいもので御ざる

斬本 管巻 1777

2 詞 コレ小助殿。此開がしい大晦日に何所へ往て居やしゃつた。(小助)へ、前髪がなまちょこざい置いてくれ。

(小助↓久三郎)

浄瑠璃 新版歌祭文1780

3 友次郎 あれみさつせへ。かつぎもどすぜ。へ、きこへた。あれはたしか、かごをかき習ふのだ。

(友次郎↓里風 いずれもなま通)

洒落本 通言總籙1787

4 又次「へ、」年こそ寄つたれ、そんなじゃない。

(町人またじ↓侍)

歌舞伎 韓人漢文手管始1789

5 内 いやく、わしがものならかまハぬが、是ハ娘が嫁入する、はれの道具じやハひノ 下百 へ、そんなら猶、此入ものの方がましてござりやしよ

(下百姓↓おかみ)

斬本 新撰勸進話1802

6・1 弥二「どけへいつた北八」へ、おらア飯をくつてきたが奇妙か

(弥次↓喜多)

6・2 北八「エ、あの大屋さんのとむらひの時か。へ、神に つれたもすさまじい。

黄表紙 莫切自根金生木1785

13・1 もふ手つけの口印までやらかしておいた。なんときつ
いもんか、へ、、、。そふいつても色男はうるせへの。
ハ、、、、もふねよふか

(弥次↓喜多)

13・2 へ、、、、かんにさつし。こんやアちつとうけにくか
らう。

(弥次↓喜多)

13・3 馬士「ハイくく」。モシんだなさま、ちとおねがひ
がおざります。へ、、、、どふぞ御酒を、いつばいたべたふ
おざります

(馬子↓侍)

13・4 太郎「ハテわしは、これからあるくはなぐさみだ。き
さましやれにのつていかつし 弥次「さやうなら、へ、、、
、。こりやきめうく トかごにのれば、

(弥次↓太郎)

13・5 わつちなら、さきの氣にいるにやア、ちげへのねへこ
とがおざりやすから、どふぞそれがほんとうのことならば、
わつちをナもし、へ、、、、ハ、、、、

(弥次↓河内屋)

14 滑稽本 東海道中膝栗毛1802〜1809
ドウダ、番頭、所謂主管なる者も大役だてナ。ハツハツハ
ツハ ばんとう「へ、、、。今日はどちらへ

(番頭↓医者)

滑稽本 浮世風呂1809〜1813

『遠鏡』の用例は、12と13・1〜5の間に位置づけられます。

さらに用例を多く拾えばより確かなことが言えるでしょうが、
これらの用例からしても、やはり宣長が「詞のいきほひ」を考
えて付け加えた「へ、、、」ということばは、学術書の中に置
くには異質で俗っぽく、かつ早期の例のうちに入る、要するに
斬新な表現だったと考えられます。

さらに、これらの用例と比べて『遠鏡』の笑い声の写生音の
特徴を二点指摘できます。

1、男を発話者とする点では共通している⁹⁾。

2、しかし、11〜14の用例が身分的に、下位から上位へある
いは下位同士の発話に現れているのに対し、『遠鏡』では
お互いが「デゴザル」で対話するような待遇表現のなかに
生まれている。これは、一番古い例である10に「御覧」と
「デゴザル」が見える会話に似たものとなっている。

それでは、「へ、、、」を付け加えてもよいような、『遠鏡』
に見える「デゴザル」とは、どのようなことばであり、どのよ
うな場に適したものであったのでしょうか。言い換えれば、上下
の関係だけでなく、冗談すなわち「たはむれ」を許すというこ
とであれば、親疎の関係も考慮に入れねばならないのではない
かということです。

三、「デゴザル」は、うちとけた間柄に使われる

「デゴザル」は待遇表現の一つです。たとえば、士農工商という枠組で考えるなら、上下の関係でとらえることができます。しかし、事実として「デゴザル」を使うもの同士で冗談が成り立っているのですから、親疎（敬して遠ざけるものであったかどうか）の観点からも考察が必要でしょう。

人間関係をこぼで表すものとしては、人称代名詞、特に自称と対称との対応が考えられますから、指定辞とそれに共起しうると判断できる人称代名詞の対応によつて、一応の整理がつけられると考えられます。

加えて、『遠鏡』は古今集の俗語訳であるので、人間関係が公的なものとは質の異なる「恋部」とそれ以外とで、分けて親疎を考えることができます。男女でどう違っていたかの手がかりもつかみやすいわけです。

ただし、あくまで、ある表現が生きるその場の質を問うものであつて、近世語の待遇表現体系を直接探るものではありません。

さて、以上の観点から、待遇表現を担う指定辞を含む俗語訳にしぼりこんで、『遠鏡』を整理すると表1のような結果になります⁽¹⁰⁾。孤例が見られるものもありますが、一言で言えば、随分整えられた体系であると言えます。

男を発話者とした、それぞれのケースの例を次にあげます。古今集の原歌は省きます。

○男↓男

【上位者へ】

仁和寺にきくの花めしける時に歌そへて奉れとおほせられければよみて奉りける

平さだふん

キクノ花ハウツロイマシテカラ 又カヤウニ始ヨリハ色ガマサリマスレバ 秋ノ一サカリバカリデハゴザリマセヌ 秋ガ過テカラ又マイチド盛ノ時節ガゴザリマス 恐レナガラゴゼン 陛下ノ御義モ 此菊ノ花ノトホリト存ジ奉リマス

(平貞文↓宇多天皇 国歌大観番号279)

【対等⁽¹¹⁾】

仁和のみかどみこにおまし／＼ける時に人にわかな給ひける御歌

ソコモトへ進ゼウト存ジテ 野へ出テ此若菜ヲツンダガ殊ノ外寒イ事デ 袖へ雪ガフリカ、ツテ サテ／＼ナンギヲ致シテツンダ若菜デゴザル

(御子時代の光孝天皇↓人 国歌大観番号21)

藤袴をよみて人に遣しける

つらゆき

此藤袴ハ イツヤ此方デ オトマリナサレタ貴様ノ形見ニオイテ 御帰リナサツタ袴デゴザルガ 今ニワスレガタイ

香ガニホウテサ 貴様ノ事ヲオナツカシウ存ズル

(貫之↓人 国歌大観番号240)

貫之がいづみの國に侍ける時にやまとよりこえまうてき
てよみてつかはしける

藤原ただふさ

拙者ハ貴様ヲ思フテ忘レズニ此辺マデ^三尋ネテ參ツタレバ
コソ 御無事ナト云事ナリトモ聞タレ 貴様ノ方カラトテハ

一向御尋ネモ下サレヌ サテくキツイオミカギリデゴザル
(忠房↓貫之 国歌大観番号914)

○男↓女

【上位者へ】

二條后春宮のみやすむ所と申ける時にめどにけづり花さ
せりけるをよませ給ひける

ふむ屋のやすひで

此ケヅリ花ヲ見マスレバ 花ノ咲クベキ木デモアルマイケレ
ドモ 花ガサキマシタワイ 致セバナルマジイ木ヘモ木実ノ
ナルヤウニ 年ヨリマシタ私ガ此身モドウゾ立一身イタス
時一節モアレカシト願ヒマスル儀デゴザリマス

(康秀↓春宮の御息所時代の二條后 国歌大観番号445)

【恋】

題しらず

藤原たゞゆき

富士ノ山ノモエルノハジヤウヂウノ事デ メヅラシイ事モナ

イガ ワシモオマヘノ事トサヘイヘバ 逢テモアハイデモ
イツデモフジノ山ノヤウニ 恋ノ思ヒガモエマス

(国歌大観番号680)

題しらず

よみ人しらず

ワシガ思フ人ノ来テ逢フタハ イツノ事デアツタヤラ ソレ
カラ一向ニアハズニ マアく久シウナツタ事カナ 来モセ
ヌ人ヲ待ツノハ サテくクルシイ物デサゴザルワイ

(恋部五では、男は別れて消息のない女性を待つ
国歌大観番号778)

題しらず

よみ人しらず

世ノ中ノ人ノ心ト云モノハテウド花染ノ色デ カハリヤスイ
物デサゴザルワイ

(国歌大観番号795)

考証の対象とする用例(国歌大観番号1007・1008)
は、男↓男の【対等】に所属します。この用例に関わることで
指摘できるのは、次の3点です。

1 デゴザルは男のことばを代表する。

2 「**用言+マス(ル)**」と対になる「**体言+デゴザル**」を使
う時は、男同士であれば「ワシ・拙者↓貴様・ソコモト」
と呼び合えるような仲であり、恋の部でも使えるような、

ややうちとけた表現を担う。

3 男女を問わず、改まった場面では、用言+マス(ル) / 体言+デゴザリマスが使われる。

言い換えれば煩瑣にならない、効率よい待遇表現が使われていると言えるかもしれません。

『遠鏡』の待遇表現については、小島俊夫(1998)に対称代名詞が構成する主述の呼応形式による整理があります。対称代名詞「貴様」は、小島(1998)の体系では、段階Aより下のA'、B₁B₂C₁複数の段階に、「ソコモト」も同じく段階Aより下位のB₁C₂に位置づけられています。こうした細かな上下の段階に対応するものではありませんが、ある段階の区切りについて、おおまかな肉付けができればどうかと考えられます。

つまり、「デゴザル」は最上位の段階よりは下位にある男のことばです。この段階は、親疎の観点から具体的に言えば、敬意を含みつつも、例えば男女の恋の仲でも使われるような、つぶやきも許すような、私的なうちとけた場、距離感を縮める場にあふさわしいものであった、ということでしょう。したがって「へ、へ」と笑って、あざ笑うことのない、悪意のない「たはむれ」に使えたわけです。

応用的な指摘になりますが、次の「仮名序」の俗語訳部分も、声には立てないけれども、悪意のない「笑い」が含まれているのではないのでしょうか。

マアタイテイ 歌ノシナノ六イロニ分レウ事ハ ドウモ
サーウハワケラレヌ事デサゴザル p.21

仮名序において、歌が六種類に分けられることを述べているにもかかわらず、それが実情にはあわないことを吐露している箇所にも、「デゴザル」が使われています。これは、撰者が自分たちを「拙者ドモ」(p.31)と表現しているのに符合します。いわば、苦笑あるいはもつと俗っぽく言えば「舌を出した」というところでしょうか。

さて、「デゴザル」を使う場面が、敬意を含みつつも、冗談も言える、うちとけた交流の場であることは確認できました。ところが、たとえば先に引いた仮名序の俗語訳において、「デゴザル」があらわれるのはこの箇所のみです。多く使われている指定辞は、上向きの待遇のない「チャ」「デアラウ」「デアツタ」です。

次の歌の訳の場合にも「チャ」と「デゴザル」が共に現れています。

キツウ身ヲウイト思ウニハ命モ消エサウニ思ハレルケレド
モ ソレデモササガキエハセヌモノヂヤ スレバ此ヤウニ
ウイ身デモ ヤツハリソレナリニ タツテユク世デサゴザ
ルワイノ

(国歌大観番号806)

表 1

	男 ↓		女 ↓		発話者
	上位 13	対等 41	恋以外 14	恋 14	人間関係別
↑ 男	マス(ル) / デゴザリマス	マス / デゴザル	マス(ル) / デゴザリマス	マス / デゴザリマス	指定辞
	()ニ陛下(ゴゼン)・君・ソナタ	拙者・ワシニソコモト(其部)・貴様	ワタシ・ワシニ君・～様・オマヘ	ワタシ・ワシニオマヘ・君	人称代名詞の対応
	恋以外 8	恋 15	上位 1	対等 1	人間関係別
↓ 女	マス(ル) / デゴザリマス・デゴザル	マス(ル) / デゴザル	マスル / デゴザリマス	マス / デゴザリマス	指定辞
	私・ワタシ・ワタクシニオマヘ・ソナタ	ワシ・ワタクシニオマヘ・ソナタ	ワタクシニオマヘ様	ワシニオマヘ	人称代名詞の対応
	マス(ル) / デゴザル 7				
↑ 人	ワシ・オレニ()				
	マス / デゴザル 9				
↑ 自然発露	ワシニ()				
↑ 神	マス(ル) / デゴザル 3				

数字は回数

「デゴザル」の価値をさらに探るには、それが「ヂヤ」「デア
ル」などの常体の指定辞と体系的にどう張り合っていたのかを
探らなくてはなりません。

そして、この「デゴザル」の使い方が宣長特有のものなのか
どうか、ほぼ同時代の、同じ俗語の訳を試みている文献と比べ
ることも求められます。なぜならば、この「世デサゴザルワイ
ノ」という訳にあたる歌の部分は「世にこそありけれ」だから
です。あえて「で・ある」と訳さなかったとすれば、そこには
本居宣長の、俗語として認めるにあたってのある基準なり範囲
があったと考えられます。言い換えれば、ことは本居宣長の文
体に関わるということです。

四、「で」「十」「ある」の形そのものを拒否した

宣長は「デアル」について、『遠鏡』「例言」のなかで次のよ
うに言及しています。

なりなるなれば、ヂヤと譯す、ヂヤは、デアルのつゞま
りて、ルのはぶかりたる也、さる故に、東の國々にては、
ダといへり、なりももとにありのつゞまりたるなれば、俗
言のヂヤダと、もと一つ言也、
(p.11)

この言及から、古今集の歌を俗語訳する際には、「デアル」
という単語形があることを知ってはいたけれども、俗語として
は「ヂヤ」をふさわしいものと判断した、ということになりま
す。

「デアル」に関しては、すでに多くの先行研究において、同
じ口語訳の範疇に属する漢籍国字解（たとえば『春秋左氏伝国
字弁』）に、終止形の「デアル」が多く見られることが指摘さ
れています。また、漢学の影響を受けた富士谷成章の『あゆひ
抄』においても、「靡なり」の俗語訳は「(ノ)ヂヤ」「(ノ)デ
アル」であり、終止形の用法が見られます（巻四「有倫」の条）。
山崎久之（1963）では、役割語の可能性もありますが、「で
ある」（であつた・であらう）が武士ことばとして用いられて
いることが指摘されています（p.397-398）。

結局、これらの事実からすれば、漢学をベースにした教養層
たとえばいわゆる武士階級の言語に「デアル」が生きていた
ことになりました。

漢学を正統派とすれば、非主流派（いわば町人派）の宣長が
「である」を避けたことは当然だと一応は考えられます。

ところが、同じ時期に同じ古今集の俗語訳を試みた尾崎雅嘉
『古今和歌集鄙言』（以下『鄙言』と略称）には、「であらふ」
「であつた」「であり」以外に、単語形「である」が見られま
す¹²⁾。

終止形 1例（「数かぎりもないことで有けれど」）

表2 「にあり」の俗語訳

遠鏡		鄙言	
デ(サ)ゴザル	10	で(は・も)ある	18
ヂヤ	8	であつた	7
対応なし	4	対応なし	3
デアツタ	3	であらふ	2
デ(サ)ゴザリマス	2	でございます	1
デコソアレ	2	じや	1
デ…ワイ	1		
デアラウ	1		
デオヂヤル	1		

連体形 5例 (「此やうなもので有ことじや」「わしが身で有ことじや」「ひとはなで有ことじやナア」「瀧の水で有事じや」「方角で有ものじや」)

「デアル」に関わる部分で、『遠鏡』『鄙言』両者の違いを端的に示すのは、「に」+「あり」(たとえば「物にぞありける」)の訳し方です。係助詞を無視すれば、そのまま「である」が生じるからです。その結果を表2に示します¹³⁾。

この結果からわかるのは、『遠鏡』の俗語訳を仔細に検討していくと、「デアル」が見られない、というよりも、「で」と「ある」の結びつく形そのものを、俗語としては退けた、というべきことがわかります。間投助詞「サ」(「こそ。例言による)、あるいは係助詞「は」「も」を間に入れて「である」を避けることが

できたにも関わらず、『遠鏡』「ある」という語形が続くことが見られません。いわばニアミスと言えるのが「デコソアレ」です。そして、その代わりに「ゴザル」が現れているのです¹⁴⁾。

中村通夫(1967)では、文末表現が「である」であったであろう系列のものを第一次デアル資料、「じゃ」であったであろう「である」(「なり」であった「である」)、「ぞ」であった「であろう」(「ござる」であった「である」)系列のものを第二次デアル資料と呼び、『遠鏡』は「じゃ」であった「である」の第二次デアル資料だとしています。第一次と第二次を区別するのは、文末終止の「デアル」があるかないかということになります。『遠鏡』についてより丁寧に言い直す必要があらうかと思えます。『遠鏡』は、「デアル」の形そのものを、いわゆる話しことばにふさわしくないことばとして排斥した資料だということです。

その原因としては、既に述べてきたように、人と人とが対話する場に「体言+デゴザル」「用言+マス」を使うような場面を想定していたことがあげられるでしょう。

さらに、日本語史的な観点からは、結局、その当時「です」が未発達だったことがあげられるでしょう。敬意を含みつつ、うちとけた場面に適い、かつ「用言+マス」とペアになれるものといえは、現代語ならば「体言+「です」」が第一候補にあげられます。しかし、その座を占めるには「です」はまだ一般化・丁寧語化されておらず、当時の空位を最近接の「デゴザ

ル」が埋めたということではないかと考えられます。

それでは、待遇性のない、「デアル」以外の他の指定辞を選ぶ可能性は全くなかったのでしょうか。こうした俗語訳の文献を博捜しえていないので、こういう表現が見つかったとしか指摘できませんが、同時期の漢詩和訳書『訳注聯珠詩格』（柏木如亭著）^{〔5〕}に、

らふそくのながれをみたてたのなり （p 94）

なにかむしやうにかなしがりのなり （p 114）

のような「のなり」、いわば訳語として聞き直ったとも言える「なり」が見られることを付け加えておきます。

まとめ

以上論じてきた事をまとめると、本居宣長の言う「詞のいきほひ」とは、

1 敬意を含みつつも、公的な改まった場ではなく、親密にうちとけて交流できる場も想定する

2 そのような話しことばの行き交う場において、「である」という形を、原歌のことはが強要するような条件が課せられなくても、潔癖なまでにこれを拒否する

3 日本語史の観点からは、「詞のいきほひ」による『遠鏡』

の俗語訳という行為は、「です」の未発達という制約条件のもとに表現された

ということになります。

そして、こうした想定と操作を端的に示すものの一つが「デザル」の採用であったわけで、かくして宣長は、あざ笑うことなく「へ、へ」と笑ったのです。

【注】

〔1〕「例言」に見られる、「詞」「みやびごと」「歌」はいずれもことばによるものですので、次のような「いきほひ」の総称として、「詞のいきほひ」としておきます。

うひまなびなどのためには、ちうざくは、いかにくはしくときたるも、物のあぢほひを、甘しからしと、人のかたるを聞たらむやうにて、詞のいきほひ、てにをはのはたらきなど、こまかなる趣にいたりては、猶たしかにはえあらねば、p 6

（俗語の中で）うちとけたるは、心のま、にいひ出たる物にて、みやびごとのいきほひに、いますこしよくあたればぞかし、p 6

をうなの詞は、ことにうちとけたることの多くて、心に思ふすぢのふとあらはなるものなれば、歌のいきほひに、よくかなへることおほかれば、p 6

又いはゆるかたことをも用ふべし、（略）よからうをヨカロ、とやうにいふたぐひ、こというちとけたることなるを、これはたいきほ

ひにしたがひては、中々にうるはしくいふよりは、ちかくあたりて
聞ゆるふしおほければなり、p 617

(2) 先行研究では、「例言」に見られる、「こそ」「らむ」などの助詞・助
動詞の訳をもとに、それらがどれだけ対応していないかから逆算する
アプローチが多いようです。

(3) 本稿での「文体」は、基本的に「ですます体」「テアル体」などとい
う時の「文体」を指します。表現の考証によっては、本居宣長の個人的
なことばの選択を含むこともありま。

(4) 『遠鏡』の本文は筑摩版全集第三巻を使用しました。なお、引用に当
たって論証に支障のないと判断して一部表記を省略、あらためたところ
があります。

(5) 『遠鏡』は1793刊行として引用されています。

(6) 東洋文庫版『古今集遠鏡2』p 220の異同注記から。

(7) 検索は、ひらがな表記の「へ」、「へ」とカタカナ表記の「へ」、「
へ、」で行いました。

(8) その他に「へ、」は同じような用法で8例見られます(大系本文p
209・211・214・237・301・387・466・485)

(9) 天沼寧(1977)において、「藤栗毛」の「へ」、「へ、」系の笑
いは男のものであることが指摘されています。

(10) 国歌大観番号との対応をつけてより精彩に示したものが次の表3で
す。なお、本動詞としての「ゴザル」は対象としていません。

(11) 厳密に言えば敬語を使っているのですから、対等ではありません。
敬意を持ちつつ、内容的には、ほぼ対等の親しいもの同上の対話に

なっている、ということから「対等」と略称しています。

(12) 『古今和歌集鄙言』の本文は、後藤剛編『古今和歌集鄙言の国語学的
研究 影印・翻刻篇』(武蔵野書院)、検索には同索引篇をそれぞれ使用
しました。

(13) もとの歌個々との対応をより精彩に示すのが次の表4です。

(14) 1991年の論文で筆者は「代用」という、大ざっぱなとらえ方をし
ていました。ここに修正します。

(15) 本文は岩波文庫本を使用しました。

【参考文献】

天沼 寧(1977) 『東海道中藤栗毛』に使われている擬音語・擬態語に
ついて 『近代語研究』 第五集、武蔵野書院

飯田清志(1999) 『日本語の書き言葉における口語性の研究(その2)』

— 笑い声表記の成立と発展(古代〜近世) — 『比較文化研究』 第45号

小島俊夫(1998) 『古今集遠鏡における近世語訳の敬語体系』 『日本敬語

史研究 後期中世以降』 所収、笠間書院

中村通夫(1967) 『である再考』 『中央大学文学部紀要』 文学科22号

中里理子(2007) 『笑いを描写するオノマトペの変遷 — 中古から近代

にかけて —』 『上越教育大学紀要』 第26巻

山崎久之(1963) 『国語待遇表現体系の研究 近世編』、武蔵野書院

(つかもと たいぞう) 大学院文学研究科第十四回修了

／宮崎学園短期大学)

表3

		男 ↓		女 ↓		発話者
上位		対等		恋以外		恋
マス(ル) / マジサリマス	マス / マジサル	マス(ル) / マジサリマス	マス(ル) / マジサリマス	マス(ル) / マジサリマス	マス / マジサリマス	人間関係別 指定辞
()ニ陛下(ゴゼン)・君・ソナタ	拙者・ウジニソモト(真諦)・貴様	ワタシ・ウジニ君・～様・オマハ	ワタシ・ウジニ君・～様・オマハ	ワタシ・ウジニオマハ・君	ワタシ・ウジニオマハ・君	人称代名詞の対応
248, 269, 279, 352, 354, 399, 832, 966, 970, 997, 998	21, 38, 133, 167, 219, 240, 355, 373, 379, 383, 384, 386, 389, 390, 397, 398, 425, 833, 843, 859, 869, 870, 876, 914, 917, 956, 969, 971, 976, 977, 978, 979, 980, 991	618(代), 645, 705, 736, 738, 780, 784, 789, 790, 797	356(代), 364, 376, 454, 837, 857, 858, 920, 930, 938, 1000			明記
866, 1091	62, 844, 864, 877, 1007, 1008, 1068	375, 972, 973, 975	703, 739, 761			よみ人知らず
恋以外		恋		上位		人間関係別
マス(ル) / マジサリマス・マジサル	マスル / マジサル	マス(ル) / マジサリマス	マス / マジサリマス	マス(ル) / マジサリマス	マス / マジサリマス	指定辞
私・ワタシ・ワタクシニアナタ	ウシ・ワタシニオマハ・ソナタ	ワタクシニアナタ様	ウジニオマハ	人称代名詞の対応		明記
8, 52, 357, 445, 862, 871, 963	581, 588, 589, 630, 644, 646, 680, 737, 745, 768	968	992			
996	484, 778, 795, 806, 824					よみ人知らず
↑ 人		↑ 人		↑ 人		
マス(ル) / マジサル		ウシ・オレニ()		マス(ル) / マジサリマス		
16, 945, 958, 988, 1029, 1033, 1105				マス / マジサル		
↑ 自然震		↑ 自然震		↑ 自然震		
↑ 神		↑ 神		↑ 神		
263, 291, 298, 300, 345, 887, 918, 922, 929		ワジニ()		マス(ル) / マジサル		
				420, 421, 871		
狐例						
849 アオサヤル		982 マジサニス		972 マスマジサラウニ		
		737 ソナタ				

表 4

	国歌大観 番号	原歌の形	遠鏡	鄙言
にあり	204	にぞ有ける	デアツタワイ	で有たことじや
	212	にぞ有ける	ヂヤワイ	で有た事じや
	245	にぞ有ける	ヂヤワイ	でハ有ことじや
	382	にこそ有けれ	デコソアレ	で有た事じやナ
	390	にこそ有けれ	ヂヤワイ	でハ有事じや
	414	にぞ有ける	ヂヤワイ	であつたのじやナ
	430	にこそ有けれ	ヂヤワイノ	でハ有ことじや
	778	にぞ有ける	デ _サ ゴザルワイ	でハ有ことじや
	795	にぞ有ける	デ _サ ゴザルワイ	でハ有ことじや
	797	にぞありける	デ _サ ゴザリマスワイ	で有ことじやナア
	806	にこそ有けれ	ワ _サ ゴザルワイノ	でハ有ことじや
	818	にぞ有ける	デ _サ アツタワイ	で有たことじやナア
	824	にこそ有けれ	デ _サ ゴザルワイノ	で有た事じやナア
	830	にこそ有けれ	デアツタワイ	で有た事じや
	833	には有ける	デゴザルワイ	でハ有事じや
	849	にぞ有ける	デ _サ オヂヤルワイ	で有事じやわい
	864	にぞ有ける	デ _サ ゴザルワイ	でハ有ことじや
	866	にぞありける	デ _サ ゴザリマスワイ	でござりますことじや
	918	にぞ有ける	デゴザルワイ	では有ことじや
	929	にぞ有ける	デ _サ ゴザルワイ	で有事じや
945	にこそ有けれ	デ _サ ゴザルワイ	でハ有ことじや	
990	にぞ有ける	ヂヤワイ	でハ有ナア	
1019	にこそ有けれ	デコソアレ	でハ有事じや	
1065	にぞ有ける	デ _サ …ワイ	でハ有ぞ	
にある	65	にもあるか	×	×
	330	にやあるらむ	ヂヤカシラス	でかな有ふ
	566	にも有かな	×	×
	684	にもあるかな	ヂヤ事カナ	でハ有ことかな
	688	にはあるらむ	デカナアラウ	で有ふ
	877	にも有かな	デゴザル事カナ	でもあること哉
1059	にもあるかな	×	×	
にあれ	389	にしあれば	×	じやによつて